

原子炉実験所だより

目次

1. 所長就任に際して（西原英晃）	1
2. 研究炉の復旧作業と運転再開準備状況について	2
3. 平成元年度下半期共同利用研究の公募について	2
4. 平成元年度上半期臨界集合体実験装置 共同利用研究の審査結果	3
5. 平成元年度ワークショップ、専門研究会の審査結果	5
6. ワークショップ、専門研究会の紹介	6
7. JAPAN IN MEMORY (DERIANA WADITO)	8
8. 実験装置・設備ニュース ——放射能イオンクロマトグラフ装置——	11
9. 放射線業務従事者の証明書について	12
10. 共同利用研究員宿泊所に関するお知らせ	13
11. 食堂の利用方法について	13
12. 所バス運行時刻の改正について	14
13. 原子炉応用センター閉館日の変更	15
14. 審議員、運営委員、臨界集合体実験装置 共同利用委員の異動	16
15. 海外学術機関との学術交流協定の締結	16
16. 外国人研究者講演会報告	16
17. 職員の異動	18
18. 委員会メモ（平成元年1月～3月）	19
編集後記	20

1. 所長就任に際して

所長 西原英晃

所長就任にあたり、遅ればせながら一言ご挨拶申し上げます。

ご承知のように、原子炉実験所では、将来計画として長年にわたって2号炉建設を掲げ、その実現に向かって努力を重ねてきております。しかし諸般の事情により今日までその着工を見るには至っておりません。また、近年、大学附置研としてのあり方をも問われてきております。更に1号炉KURは、昨年4月以降、長期間の運転停止を余儀なくされており、原子炉実験所は設置以来最も困難な局面に置かれております。

このような状況のもとで、昨年来次期所長候補者の選考について、審議会、運営委員会、所員会議等において議論が重ねられ、その中で所長の望ましい姿として、幾つもの要件があげられました。一々吟味するまでもなく、それらの要件を満たすには自分はほど遠いところにいると痛感しております。また、就任後関係各方面の方々にご挨拶する機会があるたびに、原子炉実験所の置かれた社会的立場と取り巻く諸問題の複雑さ、解決の困難さを今さらのように感じました。

困難な状況を緩和し、研究所としての信頼性を取り戻すためには、より高度で先端的な研究を推進し、その成果を世に問うことが前提となります。このため、岡本前所長のもとで、冷中性子源設備をはじめKUR周辺の研究設備の整備が進められてきました。別途研究炉部からご報告している通り、まずは一日も早くKURの運転を再開し、研究所の信頼を回復したいと思っております。

また、冒頭で述べましたような重要問題についても、関係諸機関と連絡を密にとりながら、微力ではございますが解決の道を探りたいと思いますので、ご指導下さいますよう、お願い申し上げます。

2. 研究炉の復旧作業と運転再開準備状況について

重水タンク修復等の重水設備作業および熱交換器の更新とその据付工事等の研究炉復旧作業は、前号でお知らせした線に沿ってほぼ順調に進みました。

トリチウム漏洩の原因となった熱電対挿入さや管の溶封が無事完了した後、重水タンクの配管接続部の漏洩検査、タンク前面の健全性調査、重水設備地下系統の部品交換と健全性確認等を実施し、ついで重水タンク内が軽水の状態で設備の昇温試験を行って異常がないことを確認しました。つぎに、設備を重水に復旧し、黒鉛層、鉛層を組み込み、この状態で周辺のトリチウム濃度等に異常がないことを1週間以上にわたって観察したうえで、最後に上下シャッター等を組み込んで、設備を元の形に戻しました。ここで、重水状態で昇温試験を実施し、再度トリチウム濃度等に異常がないことを確認しました。これで炉の運転をとまなわない重水設備の作業および試験をすべて終了しました。

一方、熱交換器についても、工場にて製作された2基の新しい熱交換器が現地に到着し、直ちに据付工事を行い、ついで通水試験、循環ポンプを用いての性能試験を実施し、設計通りの伝熱性能が確認されました。また、研究炉の他の部分の種々の点検もこの時点までに終わりました。

以上の結果を受けまして、科学技術庁検査官立会による研究炉の運転試験を含む定期検査が実施され、低出力から順次出力を上昇して、最後に5 MW連続運転試験を行い、この間設備周辺のトリチウム濃度等にも異常がなく、4月末までに定期検査のすべての項目を無事終了し、このほど6月14日付にて定期検査合格証の交付を受けました。

以上のように、研究炉は長期にわたる補修、復旧および点検等の作業および今回の定期検査等をすべて終了し、従前の状態に復旧致しましたので、永らくお待ちいただいた利用者の方々に一日も早く実験していただけるよう、利用運転の再開に向けて鋭意準備をすすめているところです。

研究炉部

3. 平成元年度下半期共同利用研究の公募について

研究炉の運転再開が可能となった場合、平成元年度下半期共同利用研究の公募につきましては、4月14日の運営委員会において、下半期を10月1日から平成2年1月末までとして公募を行う方針が了承されました。

なお、各研究機関あて公募通知は、具体的な運転スケジュールが決まり次第行方予定ですのでご留意下さい。

共同利用研究の審査結果

臨界集合体実験装置共同利用採択一覧

申請者・協力者		実 験 課 題	採 択 区 分	出張人数
氏 名	所 属 ・ 職 名			
関谷全 青木繁 川越義 宇都成 小都啓 日山伸 藤原秀 巻上毅 菊池裕 神田啓 代谷誠 宇根博	阪大・工・教 授 " " " 生 " " " " " 生 京大・工・助 授 " " " " " 生 " " " " " 生 " " " " " 生 原子炉・助 授 " 助 手 " " " 手	濃縮ウラン板を用いた硬い中性 子スペクトル炉の臨界実験	共同通年	上半期 2人×1日 下半期 2人×6日 5人×6日
竹田敏 青木一 仙石明 宇都久 神都昭 代啓 宇啓 根誠 崎博	阪大・工・助 授 " " " " " 生 " " " " " 生 " " " " " 生 原子炉・助 授 " 助 手 " " " 手 " " " 手	天然ウランブロックを用いた準 稠密格子炉心の特性実験	共同通年	上半期 2人×1日 下半期 1人×6日 3人×6日
木村逸 金沢郎 巻毅 市千 林博 小林平 茶圭 谷圭 浩	京大・工・教 授 " " " " " 生 " " " " " 生 原子炉・助 授 " 助 手 " " " 手 " " " 手 " " " 技 官	トリウム転換ハイブリッド炉の 基礎研究	共同通年	上半期 2人×1日 下半期 1人×2日 1人×10日
小日林 日藤啓 巻伸 菊秀 竹上毅 仙池裕 川田敏 神越義 代谷誠	京大・工・助 授 " " " " " 生 " " " " " 生 " " " " " 生 " " " " " 生 阪大・工・助 授 " " " " " 生 " " " " " 生 原子炉・助 授 " 助 手	稠密格子炉心における反応率分 布の金線の径への依存性の測定	共同通常	1人×6日 2人×6日

申請者・協力者		実験課題	採択区分	出張人数
氏名	所属・職名			
平川直弘 岩崎智彦 奈良英樹 君山博之 伊藤伸夫 小代林圭二	東北大学工学部教授 " 助教 " 院生 " " 原子炉助手 " "	箱放射化法による炉心中心スペクトルの推定	共同通常	2人×6日 3人×6日
工藤和彦 江藤拓敏 岡本圭二 小代林圭二	九大工学部教授 " 院生 " " 原子炉助手 " "	臨界炉心中での箱反応率の測定	共同通常	1人×6日 2人×6日
仁科浩二郎 山根義宏 立松篤 松村和彦 須田憲司 スダ憲 安藤真樹 神田啓治 小代林圭二	名大工学部教授 " 講師 " 院生 " " " " " " 原子炉学部学生 " 助教 " 助手 " "	高転換軽水炉の中速スペクトルを模擬したゾーン型炉心の特性実験	共同通常	1人×4日 1人×13日 3人×13日
山根義宏 須田憲司 安井肇 長壁正樹 スダ正樹 安藤真樹 小代林圭二	名大工学部講師 " 院生 " " " " " " " " 原子炉学部学生 " 助手 " "	不均一燃料体系の燃料インポートランス分布の測定(II)	共同通年	1人×13日 4人×13日
小川喜弘 神田啓治 代谷誠	近大理工学部助教 原子炉助手 " "	濃縮ウランを用いた中性子スペクトルの硬い炉心の臨界実験	共同通年	上半期 1人×1日 下半期 1人×6日

(平成元年2月20日臨界集合体実験装置共同利用委員会)

5. 平成元年度ワークショップ、

専門研究会の審査結果

運営委員会において申請のあったワークショップ3件、専門研究会15件を審査の結果、ワークショップ2件、専門研究会12件が採択されました。

平成元年度ワークショップ採択一覧

ワークショップ名	申請者	開催責任者	
		所 外	所 内
冷中性子及び超冷中性子に関する開発と応用	秋吉 恒和	広 大 総 合 教 授 好 村 滋 洋	宇津呂雄彦
低温照射・制御照射装置の開発と応用	吉田 博行	香川大教育 教授 中川 益夫	吉田 博行

(平成元年4月14日運営委員会)

平成元年度専門研究会採択一覧

研 究 会 名	申 請 者	開催責任者	
		所 外	所 内
研究炉安全のための高度システム	名 大 工 教 授 仁 科 浩 二 郎	名 大 工 教 授 仁 科 浩 二 郎	宇津呂雄彦
核分裂と核破砕の物理と工学	京 大 工 教 授 木 村 逸 郎	京 大 工 教 授 木 村 逸 郎	中込 良廣
燃料信頼性評価研究	九 大 工 教 授 古 屋 廣 高	九 大 工 教 授 古 屋 廣 高	玉井 忠治
ホウ素化合物の化学反応と ¹⁰ B中性子捕捉療法	東北大理 教授 山本 嘉則	東北大理 助手 根本 尚夫	北岡 祥伯 上野 陽里
原子炉による核化学・核物理	岡野 事行	広 大 理 教 授 吉 沢 康 和	岡野 事行 川瀬 洋一
高性能原子炉の除熱	西原 英晃	阪 大 工 教 授 宮 崎 慶 次	西原 英晃
放射性廃棄物管理	京 大 工 教 授 東 邦 夫	京 大 工 教 授 東 邦 夫	下浦 一邦
非平衡・不均一相の放射線化学	山岡 仁史	東工大理 教授 篠野 嘉彦	山岡 仁史
高転換・高燃焼原子炉	神田 啓治	阪 大 工 教 授 関 谷 全	神田 啓治 代谷 誠治

研 究 会 名	申 請 者	開 催 責 任 者	
		所 外	所 内
原子炉中性子のより有効な利用のための数理論理学	上野 陽里	京大名誉教授 上野 季夫	渋谷 巖
保健物理	辻本 忠	近大理工 教授 桂山 幸典	辻本 忠
放射線を利用した生命現象解明への展望	生島 隆治	長崎大医 助手 児玉 靖司	生島 隆治

(平成元年4月14日運営委員会)

6. ワークショップ、専門研究会の紹介

昭和63年度に開催されました専門研究会等の概要を前号に引き続き掲載いたします。なお、次号から平成元年度の開催分についてその開催内容、予定等も掲載してまいります。

ワークショップ「冷中性子及び超冷中性子に関する開発と応用」

1988年9月1日及び1989年3月14日全体会合開催

原子炉実験所のワークショップは昭和63年度に新しく設けられた制度であり、公募要項によりますと、主として原子炉実験所の将来計画や新しい研究装置の開発のために、年間複数回開催できるものとなっています。

当ワークショップは、その名のごとく、冷中性子源や冷中性子導管に関する研究開発や応用の検討、冷中性子ビーム利用実験の討論や計画、極冷中性子や超冷中性子に関する話題や開発計画等を取りあげていくこととし、その実施要領としましては、一般講演の部と特定のテーマを決めて作業や討論をする作業部会とを設け、この作業部会のテーマについては、ワークショップ参加予定者や関連分野の研究グループ等から申し出ていただくことにしました。その結果、昭和63年度は次のような5つの作業部会が設けられて、直ちに以下のような活動をはじめました。(敬称略)

WG-1:「中性子寿命」(担当者:帝京大・安見真次郎、京大炉・川瀬洋一他)

中性子の崩壊寿命の精密測定が現在なお必要であることを明らかにし、精度約1%の測定を導管中性子ビーム、特に冷中性子ビームを用いて測定することを企画する。

WG-2:「超流動ヘリウム」(担当者:高エ研・吉城肇、京大炉・河合武)

中性子ボトル内の超流動ヘリウムに冷中性子を入射させることにより、高密度の超冷中性子を発生する方式について検討と開発をすすめ、あわせて超流動ヘリウムの物理を研究する。

WG-3:「中性子散乱を用いた超伝導体の研究」

(担当者: 広大総科・好村滋洋、京大炉・川野真治)

最近話題となっている高温超伝導体について、中性子散乱による研究を色々な角度から討議解明するための場とする。例えば、話題の高温超伝導酸化物は第2種超伝導体に属し、その内部に形成される磁束線格子を通しての解明に有利な長波長中性子の利用をすすめる等が討議された。

WG-4:「重力分光器」(担当者: 京大炉・宇津呂雄彦、原研・川端祐司)

京大炉において発案された超冷中性子重力分光器は、散乱過程における遷移エネルギー及び遷移運動量の両面に高分解能の特徴を有し、その1号機を製作して性能を試験することに関する作業をすすめた。

WG-5:「中性子干渉計」(担当者: 京大炉・海老沢徹、東大工・菊田惺志)

これまでのシリコン単結晶型中性子干渉計に対し、新しい方式として多層膜中性子干渉計を試作し試験していくとともに、その利用実験についても検討すること。

以上のほか、次年度に作業を計画している部会として、生体物質と合成高分子に関するWG(担当予定者: 京大炉・山岡仁史、前田豊)および冷中性子ラジオグラフィーのWG(担当予定者: 立教大・小林久夫、京大炉・米田憲司)の申し出があります。

当ワークショップは、昭和63年度に2回の全体会合を開催し、これらについて報告書を作成し配布しています。また、平成元年度も活動を続けることが認められました。

(紹介者: 宇津呂雄彦〈京大・原子炉〉)

専門研究会「放射性廃棄物管理」

1988年11月14日、15日開催

放射性廃棄物の安全管理に関する研究・開発は緊急を要する重要な課題であり、しかも多分野にまたがる極めて学際的な問題でもある。本専門研究会は、放射性廃棄物の処理・処分や安全評価手法等に関連する課題について、内外の情報や研究成果を収集し評価を加え、この分野の研究・開発に寄与せんとするものである。昭和61年度に開催した研究会では、この分野に関心を持つ大学・研究機関の研究者と産業界の研究者併せて約70名の参加者をえて、「各国の地層処分安全評価シナリオ」「確率論的安全評価手法の地層処分への適用法」「再処理プラントの廃溶媒処理技術」「デコミッショニング技術の現状」「放射性核種の地中移行モデル」等について研究報告があり討論・検討が行われた。昭和62年度には、約60名の参加者で、「海洋底下処分法」「長寿命放射性核種の消滅処理」「HLWのガラス固化技術」「自然現象と放射性核種の挙動」「原子力分野へのファイン・

セラミックス適用の現状」等の研究報告を中心とする研究会を開催した。

昭和63年度の研究会では、65名が参加して、つぎに示す7件の研究報告等が行われた。

1. 山崎伸道（高知大理）「高レベル及びTRU廃棄物の水熱処理技術」
2. 久保田益充（原研）「群分離技術の現状と廃棄物問題への適用」
3. 梅木博之・増田純男（動燃）「地層処分研究の第2段階の計画」
4. 菅野卓治（東北大）「核種移行の立場から見た超ウラン元素の化学的挙動」
5. 天野 恕（名大プラ研）「核融合炉開発におけるトリチウム廃棄物問題」
6. 山川 稔（動燃）「ナチュラル・アナログ研究の世界の動向と動燃における研究の現状」
7. 松鶴秀夫（原研）「浅地層処分の安全評価手法」

これらの研究報告は、「放射性廃棄物管理専門研究会報告書（昭和61年度、昭和62年度および昭和63年度）」に要約されている。

（紹介者：東 邦夫〈京大・工〉・下浦一邦〈京大・原子炉〉）

専門研究会「原子炉による核化学・核物理」

1989年1月24、25日開催

安定線から遠く離れた核に関する研究は、現在の核化学・核物理学の重要な研究分野の1つであり、現在建設されている大型加速器においてもこの分野の研究を主たる柱の1つとしているものが多い。原子炉熱中性子による核分裂の研究は古いテーマではあるが、高度な測定技術の進歩によって、いまなお研究の最前線を担っている。現在、 10^{-5} ～ 10^{-6} %の核分裂収率の領域まで測定が進んでおり、扱い得る核種の数は一躍的に増大してきている。このような情勢にかんがみ、従来の短寿命核計測専門研究会に引続く形で本研究会が開催された。

研究会においては、核分裂によって生成される短寿命核の崩壊の研究に必須であるのみならず、インビーム核分光による核の高スピン状態の研究にも不可欠ないくつかの多カウンター式測定系について興味ある報告が行われた。また、短寿命核の研究に不可欠なオンライン同位体分離装置に関する最近の新しい進展、とくにイオン源技術やレーザー核分光に関する新しい開発、あるいはLEPS、Ge、液体シンチレーションカウンター等を用いての β 線、X線、 γ 線測定の新技術、迅速化学分離技術等多くの話題について討論された。また、これらの手段を用いて行われた中性子過剰核種の核分光、磁気モーメントの測定、陽子過剰核の陽子崩壊、 α 崩壊と核変形等興味ある新しい報告が行われ、質疑討論が活発になされた。

これら諸報告の詳しい内容は、KURRI-TRにまとめられており、希望者は図書掛へ申し込めば配布されるのでぜひ参考にして頂きたい。

（紹介者：岡野事行〈京大・原子炉〉）

7. JAPAN IN MEMORY

KUMATORI, MARCH 1989

It was 18 months ago that I made a short visit to Japan for a training course. I came to Japan on October 7th 1987. I come from Indonesia and I lived in Jakarta (the capitol of Indonesia). I have 1 son and he is 3 years old now. I love him very much, sometime I remembered him and I wanted to stay with him during my training course in Japan, but it is impossible. Because nobody couldn't take care of him, so he must stays in Indonesia with my husband and my mother.

Before I began my training course, I studied Japanese language for six months in Osaka University of Foreign Student. This university has many foreign students; they've come from many other countries. At that time, I made many friendships with them, because I could practice my English or Japanese with them. During my Japanese course in Osaka University of Foreign Student, I lived in Kansai Foreign Student House in Suita city. Everyday, from Monday till Saturday I must study Japanese language. Japanese is very difficult but interesting. In fact, I like Japanese but the problem is kanji. Kanji is really my weak point. Because kanji has Chinese readings and Japanese readings; these are called *On* and *Kun* readings, and I must memorize both of them. It takes a long time to memorize a new kanji. However that can not be helped. Although I can not speak Japanese fluently, but I must practice and use it everyday. So I must use a dictionary. I use not only an Indonesian-Japanese dictionary, but also a Japanese-Indonesian dictionary. Sometime I have trouble, because it is hard to find a good dictionary for foreigners.

After I finished my Japanese course, I begin my training course in Research Reactor Institute, Kyoto University. This institute is in Kumatori town, Southern Osaka. But some of my friends always make mistake, they

thought the institute was in Kyoto City. At the first time, I also thought like that, but I am happy lived in Kumatori. I lived in small apartment near the institute with my friend Laksmi. She is also Indonesian. My apartment was very convenient, it is only 7 minute walk from the institute. And there is also small supermarket in which I can buy some foodstuffs. My neighbour were friendly, sometimes I received Japanese cooking from them, it was delicious. They also help me whenever I want, it's make me feel happy.

Japan is a small country, but it's nature is wonderful. There are many beautiful mountains and rivers too. Mount Fuji is the most beautiful mountain I ever seen in Japan. There are also a big bridge namely : Seto bridge. It is the biggest bridge I ever seen in my life. It is a new and wonderful bridge. The scenery around the bridge is beautiful. The blue river, small and big ships and the sun setting on the horizon was very beautiful.

There is four season in Japan, Spring time, it's time where the cherry blossoms come out. They are very beautiful. In summer time the cloud are clear and bright; in the autumn the maple leaves are beautiful too. In winter it is very cold, especially for me. There may even be snow. I can not stay for a long time in cold country. It is very hard for me to get up and go to the institute every morning in winter time.

As I've lived here for more than one year, I can learn the Japanese life. They like worked hard, took the things seriously and had a quick response to any problem that arise. Some people like read a book, in a bus or train they always read a book. Sometime I want to do like that. I am very glad I could come to Japan. And last but not least I want to say many thanks to all of my friends in Japan and I hope our friendships will be forevermore. I will remember Japan all in my life and I want to come again to Japan if I have a chance (who knows?).

DELIANA WADITO

NATIONAL ATOMIC ENERGY AGENCY

KAWASAN PUSPIPTEK, SERPONG - TANGERANG

INDONESIA



デリアナ・ワディットさんはインドネシア原子力庁の職員で、大阪外国語大学での日本語教育の後、昭和63年4月1日から京都大学研修員として当実験所で小山陸夫教授の指導のもと、Analytical Chemistry “Adsorption characteristics of trace ions onto the surface of materials from ultra dilute solutions” の研究に従事、平成元年3月末帰国されました。

8. 実験装置・設備ニュース

—放射能イオンクロマトグラフ装置—

本装置は、水溶液中に微量存在するイオン種の分離分析用として、昭和56年度以降平成元年度に至るまでの科学研究費をもとに購入したものであります。

イオンクロマトグラフ装置としては、東ソー株式会社製の高速液体クロマトグラフ装置をベースに、ノンサプレッション方式を採用し、試料量は、わずか20～200 μ lと少量あれば、イオン種の分析には充分といえます。カラムで分離されたイオン種は、複数の検出器（紫外可視分光光度計、電気伝導度計、2"×2"NaI(Tl) 付波高分析器を備えた放射能検出装置）で、それぞれからの情報を同時に得ることができるとともに、検出された各分離ピークに対応したフラクションをピークの状況を観察しながら分取することができるようになっています。

データ処理は、パーソナルコンピュータでおこない、ピーク位置、ピーク面積等の算出値やクロマトグラムがプロッターに打ち出され、データを取りながらも、他のすでに得られたデータの再計算（パラメータ等をかえて）も行うことができるようになっています。

本装置は、水溶液中に存在する多種類の陰イオン種や陽イオン種の微量迅速分析のほか、ウラン等の中性子による核分裂の結果生成した核分裂生成物の化学種の分離分析が容易に行える利点があります。さらに、複数の検出器による同時測定結果が得られることより、比放射能に関する情報が簡単に得られ、同位体希釈分析への適用の可能性も有しています。

設置場所：原子炉棟ジュニアケープ室

問い合わせ先：玉 井 忠 治

9. 放射線業務従事者の証明書について

これまでは、京都大学原子炉実験所が実施する保安教育（以下「保安教育」という）を受講した共同利用研究者に対して、「放射性同位元素等取扱者手帳」（以下「手帳」という）を交付し、放射性物質等の取扱により受けた被曝線量等を各自で記入して頂いておりましたが、今回の法令改正を機会に「手帳」の使用を取り止め、新しく、「京都大学原子炉実験所放射線業務従事者等証明書」（以下「証明書」という）を交付することにいたしました。

この「証明書」は、所属機関において放射線業務従事者として登録されている共同利用研究者で、「保安教育」を受講した者に対して交付するものです。そのため、従来より「手帳」の交付を受けていた方は、来所時に保健物理室に「手帳」を提示し、新たに京都大学原子炉実験所放射線業務従事者としての「証明書」を受理して下さい。そして、以後の来所時には「証明書」を各自携帯願います。

なお、この「証明書」には被曝線量を記入する欄がありませんので、「個人管理用放射線測定用具借用願」および「管理区域立入記録」に必ず被曝線量を記入して下さい。後日、保健物理管理室より所属機関の責任者に「放射線被曝に関する通知」が送付されますので、記載されている値と各自控えられた値とが異なっている場合には保健物理室にお申し出下さい。

保健物理管理室

10. 共同利用研究員宿泊所に関するお知らせ

○ 女性用バス、トイレを設置

このたび1階に女性専用バス、トイレを設置しました。従来の入浴男女時間帯の別は廃止され、よりご自由に利用できます。

○ 二段ベッドを更新

老朽化していました二段ベッドをすべて更新し、また全室に小型テレビを設置しました。

○ 4月1日から使用料金を改定

既にご承知のとおり、4月1日から消費税法が施行されたことに伴い、宿泊所使用料金が1人1泊につき720円から730円に改定されましたのでご了承願います。

その他、細かな環境整備は種々行っていますが、ご意見、ご希望がございましたら共同利用掛へお寄せ下さい。予算の都合もありますが、改善できる点は今後とも実現していきたいと思っております。

11. 食堂の利用方法について

平成元年4月1日から、当実験所の食堂は「若葉」食堂が経営しています。

昼食（土曜を除く）は従来の定食方式に変えて一品づつ好きな副食を自由に摂っていただく方式に変更いたしました。これにより利用方法を下記のようにさせていただきたく、ご協力をお願いいたします。

なお、昼食の代金は喫食の都度、食堂の従業員へお支払い下さるようお願いいたします。

ただし、夕食及び土曜の昼食につきましては、従来通り定食方式となり、代金につきましては利用される最初の日にお支払い下さい。

記

1. 食事の申し込み方法

従来通り、総務課共同利用掛に出張計画をご提出の際、日程と共に食事の予約申し込みをお願いいたします。

なお、食事代金の支払方法につきましては、前述のように昼食と夕食とで異なりますので留意願います。

2. 予約の取消し等について

申込まれた夕食及び土曜の昼食についての取消しは、食事予定日の前々日の午前10時までであれば、予約の取消しをさせていただきますので食堂従業員へお申出下さい。

3. 食事時間につきましては昼食は11時30分から14時まで、夕食は18時から20時までとさせていただきますので、ご協力下さるようお願いいたします。

（食品の保管衛生上、時間内に食事を摂っていただくようお願いいたします。）

4. 当分の間、カレーライス、焼き飯及び朝食につきましては、準備いたしかねますのであしからずご了承ください。

5. 日曜、祝日は営業いたしませんのでご了承ください。

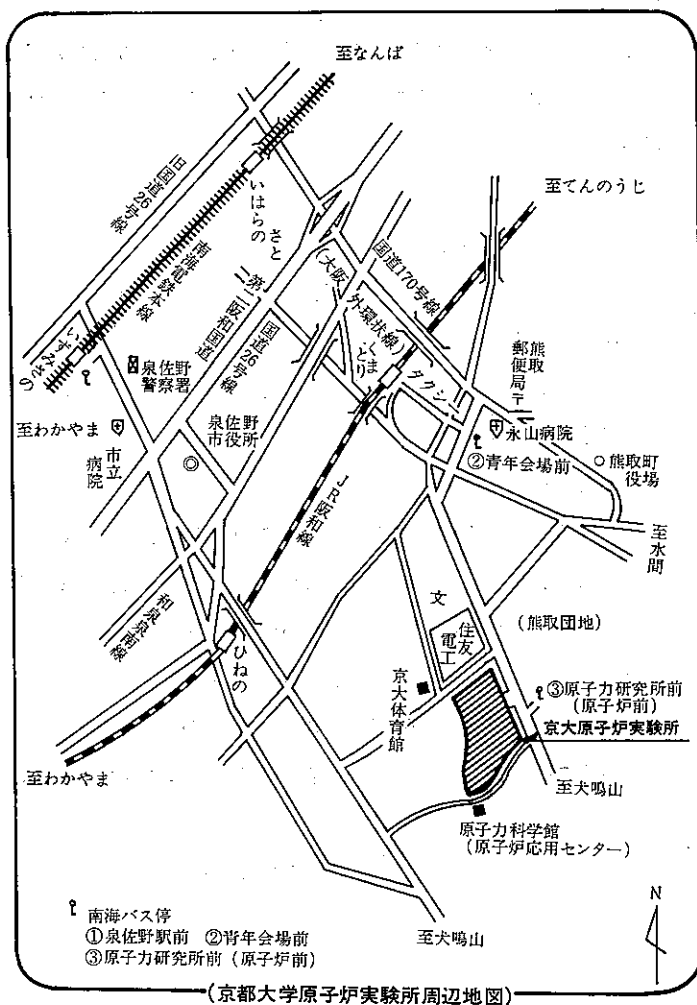
12. 所バス運行時刻の改正について

JR阪和線のダイヤ改正等により、所バスは下記時刻に運行しています。また、南海バスも4月より増発されています。

実験所バスの運行時刻表

(平成元年3月11日改正)

時	熊 取 駅 発	実験所正門前発
8	47	42
9	10 36 50	5 30 45
10		
11		
12	(40)	(35)
13	(40)	(35)
14		
15	(5)	(0)
16		
17	*8 *30 *55	*3 *25 *50
18	*35	*30
19	*35	*30
備 考 () 番は、土曜日のみ運行 * 印は、土曜日運休		



南海バス時刻表

1989.4改正

行先 時	泉佐野駅行			青年会場前→原子炉		泉佐野駅前→原子炉	
	泉佐野	熊取駅前	泉佐野	大阪体育大学		大阪体育大学	
	平	日	休日	平	日	平	日
6		37		36 58		20 42	
7	0 12 23 37 48		0 37	22 46	41	6 30 52	25 55
8	21 42 51	1 12	7 37	8 58	11 42	42	26 58
9	5 25 53		7 36	28 52	12 41	12 36 56	25 55
10	17 44		7 37	12 46	11 41	30	25 55
11	17 42		7 37	17 52	11 41	1 36	25 55
12	17 47		7 37	22 52	11 41	6 36	25 55
13	17 46		7 37	21 52	11 41	5 36	25 55
14	17 47		7 37	22 46	11 41	6 30 50	25 55
15	10 52		7 37	6 26 41	11 41	10 48	25 55
16	29 57		7 37	4 21 32 41	11 41	25 45	25 55
17	26		7 37	1 16 37 51	11 41	21 55	27 57
18	2 36		7 38	11 27 46	13 43	30 45	27 57
19	9 43		8 38	1 18 36	13 43	2 44	27 57
20	25 56		8 38	0 14 31 51	13 43	15 52	27 57
21	37	58	8	8 23 44	13 43	28	27
22				13 53			

泉陽タクシー 0724-65-1451
南海タクシー 0724-53-8200

☐熊取団地行

13. 原子炉応用センター閉館日の変更

原子炉応用センターは、従来、毎週火曜日と、祝日および年末年始（12月28日～1月4日）を閉館日としていましたが、本年度より下記のように変更しました。

- ・毎週火曜日
- ・毎月第1、第3月曜日（8月を除く）
- ・8月13日～15日
- ・祝日（祝日が日曜日にあたるときは月曜日）
- ・年末年始（12月28日～1月4日）

14. 審議員、運営委員、臨界集合体実験装置

共同利用委員の異動

○ 審議員の異動

4月1日付けで諸住高教授（北大・工）、楢山一典教授（東北大・工）各委員の後任として石樽顯吉教授（東大・工）、加藤敏郎教授（名大・工）の両氏が就任されました。任期は平成3年3月31日までです。なお、筒井天尊教授は3月31日限りで停年退官されました。

○ 運営委員の異動

4月2日付け西原英晃教授の所長就任に伴い、石田政弘教授が後任として運営委員になりました。任期は平成元年9月30日までです。

○ 臨界集合体実験装置共同利用委員の異動

4月1日付け臨界装置部長が西原英晃教授から宇津呂雄彦教授に更迭されたことに伴い、宇津呂教授が臨界集合体実験装置共同利用委員になりました。

15. 海外学術機関との学術交流協定の締結

原子炉実験所では、海外の研究機関との研究協力、共同利用、人物交流、研究会の共催などを促進するため、このたびアルゼンチン国・米国の二研究機関と学術上の協力と交流に関する覚書の調印を行いました。

相手機関は、クヨ大学バルセイロ大学院（所長アルトゥロ・ロベス・ダバロス教授、昭和63年10月7日付け調印）とカリフォルニア大学バークレー校工学部（学部長代理ジョージ・M・ライトマン教授、昭和63年12月23日付け調印）です。

16. 外国人研究者講演会報告

平成元年1月以降原子炉利用研究者グループの後援により、下記のような講演会が行われました。

① 平成元年3月2日開催

“X-ray Studies of Kr, Xe and Pb Inclusions in Al Single Crystals”

Dr. Erik Johnson

(Physics Laboratory, University of Copenhagen, Denmark)

② 平成元年 3 月 13 日開催

"Neutron Irradiation Effects on High Tc Superconductors"

Prof. B.N.Goshchitskii

(USSR Academy of Science Ural Center, Institute for Metal

Physics, USSR)

"Theoretical Understanding of Localization Effects in Radiationally
Disordered High Tc Superconductors"

Prof. M.V.Sadovskii

(USSR Academy of Science Ural Center, Institute for Electrophysics, USSR)

17. 職員の異動

1. 所長併任

平成元年4月2日付け 所長併任 教授 西 原 英 晃

2. 退 職

平成元年3月31日限り 廃棄物処理設備研究部門 教授 筒 井 天 尊
(停年退職)

平成元年3月31日限り 経理課機械掛長 技 官 野 村 弘
(定年退職)

平成元年3月31日限り 経理課機械掛 技 官 田 中 雅 夫
(定年退職)

平成元年3月31日限り 経理課電気掛 技 官 高 原 義 秀
(定年退職)

3. 昇 任

平成元年4月1日付け 計測装置研究部門 助 手 酒 井 宏
(広島大学理学部助教授へ)

平成元年4月1日付け 経理課工営掛長 技 官 石 田 勝 久
(施設部建築課第三工営掛員から)

4. 配 置 換

平成元年4月1日付け 附属原子炉医療基礎研究施設 助 手 芥 田 敏 三
(医学部附属病院放射線科から)

平成元年4月1日付け 経理課機械掛長 技 官 西 埜 邦 彦
(経理課工営掛長から)

平成元年4月1日付け 経理課機械掛 技 官 大 谷 典 生
(施設部設備課第一機械掛へ)

平成元年4月1日付け 経理課機械掛 技 官 進 士 悟
(施設部設備課第一機械掛から)

5. 転 任

平成元年4月1日付け 経理課工営掛 技 官 河 内 正 文
(和歌山大学施設課から)

平成元年4月1日付け 経理課工営掛 技 官 池 尻 四 郎
(和歌山大学施設課へ)

18. 委員会メモ（平成元年1月～3月）

1月13日	昭和63年度第10回原子炉安全委員会
20日,21日	第133回運営委員会
23日	原子炉安全委員会（回議）
27日	審議会・協議員会
2月1日	原子炉医療委員会
3日	臨時原子炉安全委員会
4日	原子炉応用センター運営審議会
10日	昭和63年度第11回原子炉安全委員会
10日	原子炉医療委員会
17日	審議会・協議員会
20日	第64回臨界集合体実験装置共同利用委員会
3月2日	審議会・協議員会（回議）
10日	昭和63年度第12回原子炉安全委員会
17日	審議会・協議員会
22日	原子炉医療委員会
23日	臨時原子炉安全委員会
24日	昭和63年度第4回保健物理委員会

編 集 後 記

昨年4月から運転を休止していましたKURもその修復を終え、いよいよ運転再開に向け着々と準備が進められているということです。実験所始まって以来の長期間の休止であっただけに、再び、熊取の地に多くの共同利用研究者の方々を迎える日が1日も早いことを願ってやみません。

今年4月から岡本前所長の後任として西原新所長が就任されました。実験所を取りまく状況が必ずしも明るいものでない現在、実験所と全国の共同利用研究者とのコミュニケーションの場として、本誌が少しでもその役割を果たすことができるよう今後も努力を続けてまいりたいと思っています。

なお、当所要覧委員会委員長の交代に伴い、新たに宇津呂雄彦教授が編集委員となりましたことを付記いたします。